

『うごきの場に居合わせる』再考

—— 3.11以降の惑星社会の諸問題に応答するために (3) ——

新 原 道 信

Reflections on *Being Involved with the Field*: Responding for/to the Multiple Problems in the Planetary Society after 3.11 (3)

Michinobu NIIHARA

This article evolved from a research project called “Responding for/to the Multiple Problems in the Planetary Society after 3.11” which is a part of *the Laboratory for the Living Knowledge in the Planetary Society’s* activities at the Institute of Social Sciences, Chuo University. The project is based on the idea that exploring, against the tide of the disposition to dissociate/disengage oneself from what is happening, “regions and communities for sustainable ways of being” is urgent and crucial for the 21st century planetary society, in which the multiple problems concerning exclusion and inclusion are increasingly frequent. Throughout the project, I have sought to clarify the ways in which “Nascent Community” is lived or embodied in so-called “liminal territories” or “composite corporeality,” in which the varieties of local residents try to coexist while conflicting, merging, and intertwining with one another. Under such objectives, I conducted research and interviews in certain areas, regarding the autonomy and independence of such localities, the global inter-cooperation among the communities, and the composite/complex/hybrid identities of the community residents, while employing such key concepts as “metamorphosis” and “liminality.” The article reflects on the epistemology developed from dialogue with Alberto Melucci, Anna Melucci, Alberto Merler, Andrea Vargiu and my research experience and submits a theoretical framework for conceiving and coping with the ongoing problems. In that, the article sets out an exploration for what might be called “Being Involved with the Field”

キーワード：未発のコミュニティ，異文化，社会運動，エスニシティ，在住外国人，難民，共生，フィールドワーク，移動民の子どもたち，メルッチ，惑星社会，内なる惑星

こんにち必要なのは、問題のなかに予め答えが含まれているような問題解決だけではなく、新たな問いを立てることに私たちの創造的な力を向けることであるということが、ますます明らかになってきている。もし創造性と問題解決とを同一視してしまうと、創造的活動は、必ずしも所与の問題に対する解答を導くものではなく、むしろそれは提示された問いのレベルにおけるフィールドを常に再構築することを要求するのだ、という事実を見落としてしまうだろう。芸術のように、問題を解決するわけではない創造的活動が存在するし、またある一定の枠内に制約された創造的とはいえない問題の解決だって存在する。

私たちの社会は、創造的プロセスを促す個人の資源を発展させていくという試みに直面している。すなわちそれは、リスクを受け容れ、規定できないものを甘受し、既に知られ、分類され、決定されていたかに見えるものを、一時保留にすることを厭わないような能力である。それはまた私たちの心を開き、新たな領域を切り拓くために、自分自身の抑制や不安定さを乗り越えていく能力である。それゆえ創造力とは、それがいかに定義されようとも、驚嘆するという私たちの能力にかかっているのだ。(Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996年=新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』ハーベスト社, 2008年, 196ページ)

私たちは、人間の知性が、抽象的な思考を生み出すことを知っている。しかし、それと同時に、私たちの身体は、この惑星地球という生身の存在に深く根をおろしている。こうして私たちは、記憶をたくわえ、その記憶を何度も何度も練り直していく——家族についての記憶、前の世代の記憶、どんな家に住んでいたのか、故郷はどんなところだったのか、どんな季候のどんな場所で育ってきたのか、少年時代、青年時代、青春をどのように過ごしてきたのか、誰と出会い、誰を愛し、誰を憎んだのか、どんな空の下で人生の意味を学んだのか、人生の方向を定める星座をどのようにつくったのか、どんな森、荒野、山の頂、雪、河や海で私たちは出会い、自分を、他者を識ったのか。

私たちは、こうした追憶のフィルターとレンズによって、私たちのなかに深く根付いた生身の現実の意味を学び、問いを発する。複合し重合する私は、厳格に存在しているかのように見える「境界線」をあまり気にすることもなく、いまとなっては慣れ親しんだ境界の束をこえていく。そして、自らの旅の道行きで獲得した固有の見方に従いながら、いくつもの異境を越え、「厳格な境界線」の限界を抜け出ていく。たとえ「ノーマルではない」「違っている」「マイノリティだ」「不適応だ」と言われても、異境を旅する力とともに生きてゆく。

仮想の「正常さ」や「画一性」から見たらじっくりこない社会文化的な島々として、

たとえこの真剣なコンチェルトの試みが、トータルには理解されていないとしても、より多くのひとの耳に、この不協の多声が届くことを願いつつ。

(Alberto Merler e Michinobu Niihara, “Terre e mari di confine. Una guida per viaggiare e comparare la Sardegna e il Giappone con altre isole”, in *Quaderni Bolotanesi*, n.37, 2011年 = 新原道信訳「海と陸の“境界領域”——日本とサルデーニャを始めとした島々のつながりから世界を見る」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部, 2014年, 86-87ページ)

1 はじめに——『うごきの場に居合わせる』（中央大学出版部, 2016年3月）へのリフレクション

本稿は、中央大学社会科学研究所のヨーロッパ研究ネットワークを母体とする研究チームである「3.11以降の惑星社会」（2013～2015年度）の研究活動に基づいている。本研究チームは、社会的痛苦の縮減を可能とする共成システム¹⁾である「生存の場としての地域社会の探究／探求（Exploring Regions and Communities for Sustainable Ways of Being）」「異質性を含み込んだコミュニティの在り方²⁾」の探求を長期目標としている。A. メルッチが提唱する「惑星社会（planetary society）」論を現代社会認識の基礎とし、そこに生ずる社会問題を引き受け／応答すること（responding for/to the multiple problems in the planetary society）、とりわけ、「3.11以降」の“生存の場としての地域社会”形成に向けて、“惑星社会のフィールドワーク（Exploring the Planetary Society, Esplorando la società planetaria）”をすすめていくことを眼目としてきた。

惑星社会論は、システム化・ネットワーク化の可能性に注目するグローバル社会論に対して、自然や資源の有限性、極度にシステム化した社会の統治性の限界に着目する現代社会論である。惑星社会の問題は、個々人の社会的痛苦の問題として現れる。「内なる異質性」の問題が顕在化したコミュニティに暮らす個々人は、「環境・エネルギー政策」「高齢化」「家庭教育」「青少年問題」「被災者支援」等々、異なる諸要素をひとつに整理し理解・対処せざるを得ない状況のもとで、従来の「処方箋」では十分に対応出来ず、多面的で多層、多重の困難に直面している。不満、不安、苦悩、アルコール依存、薬物依存、病、狂気、自殺など、痛みや傷みは、澱みとなって滞留し、ある日突然、社会的な事件として噴出する。その一方で、調査研究をする側は、“未発の状態（*stato nascente, nascent state*）”³⁾で伏流している問題を根本的にとらえなおすための理論、調査法、コミュニティで暮らす個々の住民同士がいかなる関係性を創るのか、調査者はいかなる関係性を取り結んでいくのか——すべてにおいて多重の困難に直面している。

日常生活と社会システムの間位置する社会運動の背後にあって、根本的な変化が始まる場

所である“未発の状態”にある社会文化的プロセスをとらえる社会学を、いかに再構成していくのか。こうした問題認識から、本研究チームは、「新たな、いままでにない現実をとらえる理論、概念、カテゴリー」を構想するため、グローバル・イシューズが衝突・混交・混成・重合するローカルな「場所 (luogo, place)」である境界領域 (cumfinis) のフィールドワークを行い、『“境界領域”のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に応答するために』（中央大学出版部）を2014年3月に刊行した。

同書の「縦糸」となっていたのは、初期シカゴ学派、P. ブルデュー (Pierre Bourdieu), A. メルッチ (Alberto Melucci), A. メルレル (Alberto Merler), 宮本常一, 鶴見良行等によってなされた、社会と個人の深層にまで入り込む質的調査研究の遺産を受け継ぎつつ、これまで30年ほどの歳月をかけて練り上げてきたフィールドワークの〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソツズ〉の到達点を診断するという意図であった。

他方で、「横糸」となっているのは、「惑星社会」という同時代認識とかかわる問題意識であった。すなわち、現代社会は複合・重合的なひとつのまとまりをもった有機体として形成され、私たちは、「社会的行為のためのグローバルなフィールドとその物理的な限界」という二重性を持つ惑星社会を生きている。ヨーロッパ、地中海、大西洋、日本、アメリカなどの各地の「端」や「果て」から、境界領域のフィールドワークを行い、惑星社会における生存の在り方と社会の構成のされ方を見直すという企図であった。

『“境界領域”のフィールドワーク』のとりまとめによって明らかになった課題である、『「3.11以降」の状況・条件に応答するための〈エピステモロジー／メソドロロジー〉としてのリフレクシヴな調査研究 (Reflexive research) の練成』⁴⁾ に応答するため、2016年3月、中央大学出版部より、『うごきの場に居合わせる——公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』（以下、略称を『うごきの場』とする）を刊行した。

同書は、メルッチとメルレルそれぞれとの間で構想した〈エピステモロジー／メソドロロジー〉である「リフレクシヴな調査研究」の継承・発展を企図している。「リフレクシヴな調査研究」は、初期シカゴ学派のように、living society (city, community and region) のなかで、学生・院生も含めて社会学や社会調査の理論と実践について膨大な議論を積み重ね、フィールドで出会った予想外の困難に導かれるかたちで、社会調査の〈メソツズ〉を生み出す〈エピステモロジー／メソドロロジー〉である。「3.11以前」に試みられた二つの「プロジェクト」(湘南プロジェクトと聴け！プロジェクト)への「乱反射するリフレクション (dissonant reflection, riflessione disfonica)」を試みることによって、「うごきの場 (Field, Nascent moments, momenti nascenti)」——地域小社会、コミュニティ、あるいは集団内で起こってたいくつかのささやかな生活の「断片」「諸関係の微細な網の目」がうごいていく場面——に“居合わせる (Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place)”こと

で、惑星社会の諸問題（the multiple problems in the planetary society）がもたらすジレンマの意味をとらえなおし、〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソツズ〉を練成することが、同書の眼目となっていた。

同書の「むすびにかえて」（以下、「むすび」）では、野宮大志郎教授からのレビューがなされている。本稿の課題は、この野宮教授への応答を試みることによって、これからなされるべき“惑星社会のフィールドワーク（Exploring the Planetary Society, Esplorando la società planetaria）”の“基点／起点（anchor points, punti d'appoggio）”を提示することである（以下、本論中では、「野宮」「新原」などの呼称とする）。

2 『うごきの場』の全体の構成について

『うごきの場に居合わせる』は、メルッチやメルレルの後を追いかけて、日本の地域社会での試みとして着手し、1990年代後半から2000年代半ば頃まで、神奈川で細々と続けてきたフィールドワークをふりかえった作品である。「舞台」となっているのは、インドシナ難民、日系、南米系、帰国者、移民、地方出身者などが居合わせ、衝突と出会いをくり返す「生きた吹き溜まり」（中里佳苗）となっていた公営団地（仮称「湘南団地」）である。その場で、「国際化」「治安強化」「排除」の波にさらされながらも、したたかに生き延びようとしたひとたちの「うごき」、異質なものを含み込んだコミュニティという願望と企図、未発のことがらへの投企、困難と痛苦をやわらげる「網の目」の構築の試みに出会っていた。そしてこの、“異郷／異教／異境”の地で生きる在住外国人たちの「草の根のどよめき」（古在由重）についての長期のフィールドワークによる作品である『うごきの場』全体の構成は、以下のようなものとなっている。

序——うごきの場に居合わせ、ゆっくりと、やわらかく、深く、切り結び、ふりかえる

新原道信

理論篇 惑星社会のフィールドワークにむけてのリフレキシヴな調査研究 新原道信

実践篇（モノグラフ）プロローグ この「街」の世間師と移動民の子供たち 新原道信

第1章 湘南市の概況と「研究委員会」のうごき 鈴木鉄忠・新原道信

第2章 「湘南プロジェクト」の胎動——不協の多声のどよめき 新原道信

第3章 「湘南プロジェクト」・前夜——「入る」という困難、「入る」ことの困難 中里佳苗

第4章 生きた「吹き溜まり」——「湘南団地日本語教室」の創造まで 中里佳苗

第5章 「教師」のいない「教室」——「治安強化」のなかで苦闘し葛藤する学生ボランティア 鈴木鉄忠

第6章 「聴け！プロジェクト」のうごき——『聴くことの場』ふたたび 新原道信

第7章 乱反射するリフレクション——実はそこに生まれつつあった創造力 新原道信

エピローグ 中村寛

むすびにかえて 野宮大志郎

補遺

「湘南プロジェクト」「聴け！プロジェクト」登場人物と年表 鈴木鉄忠・中里佳苗・新原道信

うごきの場での対話的なエラボレイション 新原道信・中村寛

あとがき

索引

「序」においては、「3.11以降の惑星社会」という同時代認識，そこでの危機に立ち向かう学問的要請としてのリフレクシヴな調査研究（Reflexive research），叙述の特徴，タイトルの含意などについて論じている。

【理論篇】では，本論部分で行ったりリフレクシヴな調査研究の試みの背景にある〈エピステモロジー／メソドロジー〉に関する方法論的な背景についての説明である。編者のイタリアでの調査研究の経験を端緒としてはいるものの，本論部分で紹介する個々の場面に遭遇し考えるなかで，結果的に創られてきた理論・方法論である。

【実践編（モノグラフ）】の「プロローグ」は，二つのプロジェクトの原風景を示し，本論全体の導入部分とする。

第1章では，鈴木鉄忠と新原道信により，湘南市と湘南団地との概況をトレースし，湘南プロジェクトが発足するに至った背景を確認する。そのうえで，発足前夜の1990年代半ばから現在までの湘南市と湘南団地，湘南プロジェクトのうごきについて，時期区分を行っている。

第2章は，新原により，湘南プロジェクトの長期間にわたるうごきのなかで，とりわけ根本的意味を持ったと考えられる「胎動」に焦点をあてている。主要な登場人物は，この場集った「世間師」たちと，その場に居合わせ，後から育っていった「移動民の子供たち」である。プロジェクトの最初の作り手は，何に怒り，声を発し，感情移入していたのだろうか。「内なる国際化」から「治安強化」へ，最初の「定着」から「喪失」，「日本語教師」なき「教室」への移行のプロセスを描く。

第3章は，「プロジェクト」が始まる以前の状況についての，通時的な性格を持つ描写である。うごきの場に「入る」ことをめぐる格闘・葛藤，自治会役員，民生委員，調査者，地元行政・ボランティアなどの配置が流動していくプロセスについて記述している。

第4章は，中里から見た自治会役員や民生委員，市職員，地元ボランティアたちへの理解とその変化，最初の「プロ日本語教師」による「日本語教室」の崩壊，その「喪失」のなかでの

創造について記述している。

第3章と第4章は、多面的な現実を別の角度から見たひとつのセットとなっている。もっとも長期にわたって、この「うごきの場」に居合わせた中里佳苗が、2007年と2015年という異なる時期に試みた多声かつ多重・多層のリフレクションである。フィールドの描写のもととなっているフィールドノーツ等に重複する箇所があるが、それぞれにまとまりを持つ作品であるため、そのままのかたちで再録した。

第5章は、鈴木が、「日本語教室」の崩壊のなかでの「湘南教室」創造の後、「治安強化」の波にさらされつつ、うごきの場に通り続けた大学生と移動民の子供たちの奮闘を中心に記述している。

第6章は、新原により、湘南団地と部分的に重なり合いつつ存在していた脱領域的な「コミュニティ」であった「聴け！プロジェクト」について書かれている。

【結論部分】は、一連の記述とリフレクションの結びの部位であり、次への基点かつ起点として書かれている。

第7章では、新原が、リフレクシヴな調査研究（「乱反射するリフレクション（Dissonant reflection, riflessione disfonica）」）の視点からのまとめを行う。

「エピローグ」では、中村寛により、ニューヨーク・ハーレムに入り込んだ経験を通して生じた変化をふまえたレビューを、かつて自分も居合わせていたうごきの場について試みる。

「むすびにかえて」は、異なる経路（roots and route）で、場とひとの動きを真摯に見つめ、寄り添い、調査研究してきた野宮大志郎からのレビューとなっている。

補遺では、登場人物と年表、および、この場でなされた概念生成のプロセスについての紹介がなされている。

本書の考察の対象となった「プロジェクト」で活動した中里、鈴木、中村に加えて、野宮による異なる視点からのレビューを加えることによって、本書の構成そのものが、「乱反射するリフレクション」となるように組み立てられている。

以下では、野宮の「問いかけ」のなかに入っていくこととしたい。

3 「“叙述／伝達”の方法（Darstellungsweise）」と「“探究／探求”の方法（Forschungsweise）」について

野宮はまず、『うごきの場』の叙述が「奇異な様相」を持っている点を指摘する。すなわち、「15年、20年という『湘南プロジェクト』がかかわった膨大な時間の割には、各章の記述は、その期間の中のまばらな一瞬から掬い取られたものにとどまる。それゆえ、本書全体を通読しても、人びとのうごきや事態の変転が、過去から今までの通し絵のように映ってこない」。また、「観察と執筆の視点が全体で統一されているわけでもない」。冒頭の「序」や「理論篇」

などでは、「未来の団地コミュニティーの姿を想起し、そこから溢れ出す想念と思弁に従うがままに文章が綴られ」、第3章や4章では、「その上っ面だけをなぞってしまえば、他人に聞かせる必要もない自伝的エッセイと読まれかねない筆致で話が進む」。さらには、第2章では、「時間がバラバラ」であり、「そのまま時間が過去から現在に流れると想定しながら読み始めると、混乱の中に投げ出される。その章の中のある節で、2007年に始まったプロジェクトについて語られたかと思うと、次の説では、2015年時点での振り返りを述べた後、その後の説では、1999年の合宿研究会の話が述べられる」（以上、468-469ページ）。

ひとつのコミュニティそして市民活動とかかわる個々人の「うごき」の全体像を、適切なかたちで説明していく章構成となっていない。各章における、叙述の主体と対象との関係性が統一されておらず、なおかつ、同一の主体においても、同じ「出来事」に対してのリフレクションの時期が異なっていたりする（たとえば、3章は2007年の時点で、4章は2015年で、同一の著者による同じ時期の「出来事」に対するリフレクションが重ね合わせられている）。とりわけ2章においては、通時的に「出来事」がトレースされていくのではなく、2015年時点での書き手の意識のうごきを辿るかたちで、時間軸を前後するかたちで叙述がなされている。

なぜこのように、「不統一」で「未完」「未結」のままに放置された叙述となっているのか⁵⁾。その理由は、叙述のレベルで「因果連関による説明」と「因果連関の否定」のジレンマから“ズラす”ための工夫をすることで、叙述の主体と対象との関係性を流動化させることを試みようとしたことにある。

これまで、筆者は、地域社会／コミュニティの“深層／深淵”における“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動 (movimenti nascenti)”にふれ、そこでの理解を叙述・伝達するため、各種の試行を重ねてきている⁶⁾。サルデーニャと沖縄の比較研究に始まって、エスピリット・サント（ブラジル）、川崎・鶴見、マカオ、オーランド（フィンランド）、イストリア（スロヴェニア、クロアチア）、フリウリ・ヴェネツィア・ジュリア（イタリア）、アルプス山間地（スイス、イタリア）、アゾレス（ポルトガル）、カーボベルデなどでの調査研究をすすめるなかで、地域社会の「構造」と「動態」を「理解」するためあらかじめ準備していた「分析枠組」ではどうしてもとらえきれないことがらに直面した。

こうした社会学的な地域社会／コミュニティ研究のなかで、三つの領域 (tre elementi) —— ①モノ…「制度」「階層構造」など「可視的」な「客体・実体」、②コトバ…「自然言語」「生活言語」も含めた「集合表象」、③ココロ…「心意現象」（調査研究の過程で“心身／身心現象”という言葉に変更）——を意識し、①から③へと「理解」を深めていくことを考えるようになった。すなわち、《まだ言葉にもなっていないような個々人の内面で生じている微細な現象をどうとらえるか、なぜこれをとらえなければいけないか、物理的な動きや可視的な活動の舞台裏で生起している「うごき」（失敗や葛藤、衝突と出会いなど）をどうやって社会科学として「理

解」するのか》ということが主たるテーマとして意識されるに至った。

そして社会学は、これら三つの領域の“複合・重合体 (corpo composito)”であるところの第四の領域であるところのコトガラの“探究／探求”を自らの“メチエ (職務, 誓願, 使命: *métier, professione, Beruf*)”とする。すなわち, 《〈モノ (物財) —コトバ (意識, 集合表象) —ココロ (心身／身心現象)〉の“境界領域”にあるところの〈コトガラ (のことわり) = *ragioni di cosa/causa, cause* [事柄の理, コーズ]》を“探究／探求”する営み》である。そして地域社会研究は, 《社会構造の“移行, 移動, 横断, 航海, 推移, 変転, 変化, 移ろい”の“道行き・道程”で生起する個々の現象が持つコトガラ (「事柄の理」) をとらえ, 個々人と社会の“メタモルフォーゼ (*change form / metamorfosi*)”の条件を析出する営み》である。「うごきの場に居合わせる」とは, 第四の領域であるところのコトガラの様相と動態にふれるための「窓」となり得るような状況・条件を持つであろう瞬間・場所に臨み続けようとするという意味を持っている。

しかしながら, このような意味での地域社会研究——“衝突・混交・混成・重合”によって生成しつづける「うごきの場 (Field, Nascent moments, momenti nascenti)」としての地域社会／コミュニティの“移行, 移動, 横断, 航海, 推移, 変転, 変化, 移ろい”の道行き・道程 (*passaggio*)”を“探究／探求”し, そこでの理解を“叙述／伝達”すること——の意味を, 最初から考えておく必要がある。というのは, 以下のような限界と危険性を考えるがゆえにである。

すなわち, ひとたび“異郷／異教／異境”の地としての「うごきの場」に飛び込めば, 「おまえなどにわたしたちが理解できるのか. そもそもなぜ理解しようとするのか. おまえにとって, わたしたちにとって, それはどんな意味があるのか」と問われ続けることになる。そして, 「ある範囲でなら分かるということで切りとるしかありません. 一定の視点・枠組みからでないと比較できないのですから」と答えたでしょう。ここから, 「言語や文化よりも, 物財のシステムならば比較可能であろう」といった話となり, 「体制」ないしは「構造」の「比較」がなされることになる。しかしそこでは, 「主体」は「構造」の変数であり, 言語や文化, ひとびとの生活, ましてや個々人の身体に刻み込まれた「事柄の理」はまったくの「周辺」的なトピックであるか, あるいはひとかたまりの「言語や文化, 民衆」一般という「枠」に当てはめられ, 「対象化」されていくという危険性を常にはらんでいる。

それでは, 「うごきの場」に深く入っていき, その場に“居合わせる (Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place)” ことはいかにして可能か. これは「“探究／探求”の方法 (Forschungsweise)」の問題である。そこでは, “異境の智慧 (una *cumscientia di confine*)”, すなわち相手の文脈の細かなところまでは理解 (「すべてについて何ほどかを識り, あることについてすべてを識る」ことが) 出来ない“異郷／異教／異境”

の地に対して何が出来るのか、その限界を識りつつ、ある特定の場面・場所で、なしうる何ごとかを実行する力をささえる智慧が必要となる。

“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動 (movimenti nascenti)”として“未発の状態 (stato nascente, nascent state)”にある何ごとかが質的に“メタモルフォーゼ (変身・変異 change form / metamorfosi)”する瞬間がいつどこであるのかを予測しきることは出来ない。かろうじて感知し得る蓋然性のもとで、その場に在り続け、通い続け、もどり、かえり続ける。その場に居て、「あることについてすべてを識り、すべてについて何ほどかを識る」(アダム・スミス) ことをひとまずは探究／探求し(「仮借なき[博識の]探究 (a relentless erudition)」)、それはいかなる意味で困難もしくは達成不可能であるかを体感する。「(我が身を投じて) (上野英信)、自らの限界を「我が身を持って証立てる (sich betätigen)」(ヘーゲル) しかない。

そのうえで、それでもなお、自分の出来ること、なすべきこととしての、“すべてについて何ほどかを識り、あることについてすべてを識る”ための自分の方法を練り上げる。「変化しつづける」“偏ったトタリテイ (totalità parziale)”であることの「欠落」を甘受し、それでもなんとか“生身の現実 (cruda realtà)”を“大きくつかむ (begreifen, comprendere)”というのが結果として獲得した「方法 (エピステモロジー／メソドロロジー／メソツズ)」である。

そしてもし、仮に何ごとかを「理解」したとして、「体制や構造の比較」ほどには「明晰・判明 (clear and distinct)」に語る事が出来ない「事柄の理」の“多系／多茎の可能性 (le vie possibili verso i vari sistemi)”をどのようにひとに伝えるのか。こちらは、「叙述／伝達」の方法 (Darstellungsweise)」の問題となる。つまりは、この二つの「方法」についての自覚が必要となる。またこのような「方法」を日常の実践として行うことによって、手元に残る〈データ〉は「まばらな」(野宮)ものであることへの自覚も必要となる。

それゆえ、《地域社会の「事柄の理」についての「理解」を“探究／探求”し、その内容を“叙述／伝達”する》というのは、対象を限定したうえでの「明晰さ (Klarheit)」をめざすというよりも、現実を大きくつかむ (begreifen) ことが出来る「難解さ (Dunkelheit)」をめざす試みであるかもしれない。ここでの「難解さ」とは、「暗く、どんよりとした、暗所、不明瞭な (oscuro, obscurus)」、すなわち“深層 (obscurity, oscurità)”にふれようとすることを意味する。“深層 (obscurity, oscurita)”はまた、遠目に「鳥の目」から眺望するのではなく、「虫の目」でその「穴」あるいは「淵」に臨むものの眼からすれば、「底のないもの (abyssus, byssos)」という意味で“深淵 (abyss, abisso)”でもある。

では、もし仮に、「まばらな一瞬から掬い取られたもの」(野宮)から、なんらかの意味で、“深層／深淵”の一端にふれることができたとして、「叙述／伝達」の方法」はいかなるものとなるだろうか。

論文の「書き手」である（社会）科学者は、資料の引用・要約、他の論者の議論の要約、自分の文などを、「意識的に統制」しつつ書いていることを明示することを常としている。「語り」のレベルを「書き手」が完全に「統制」するということは、「書き手」という「神」がその世界を支配していることを意味する。しかしながら、“出会った”土地、ひと、「事柄の理」などが、それぞれに声を発し、しかもその声のひとつひとつに、異なる声が含まみ込まれているような場合、その乱反射するうごきの様相を出来る限り忠実に表現しようとすればするほど、「どんよりとした、不明瞭さ」を持ったものとならざるを得ない。

「書き手という神」は、首尾一貫した「近代的自我」であり、他の論者や、対象とは明確な一線を画することによって存在可能なものだが、“深層／深淵”という言葉で捉えようとしている領域に、あえて勇気をもって踏み込んでいくならば、首尾一貫した「自我と対象」という関係に「裂け目」が生じざるを得ない。さらに困難なことに、“深層／深淵”（として表象しているもの）は長い時間をかけて造られるものであると同時に、流動性を持っている。その“流動体（*corpo fluido*）”は、近づいたと思った瞬間に「逃げ水」のように遠く離れていく存在である。

ここでは、“深層／深淵”での「うごき」についての「明確な」「理解」から出発し、演繹的に精緻な論理を構成していくことはきわめて困難だと考えたほうがよい。むしろ、その「うごき」のおおよその姿を“粗描する（*abbozzare*）”しかなく、内容そのものが要求する固有の「叙述／伝達」の方法に即して言葉にしていく、ということになるだろう。論じるべき内容が形式を規定するのであるから、内容に固有の「叙述／伝達」の方法が採用されるべきである。

〈“揺れうごきつつかたちを変えていく（*playing and changing form*）”場についての理解と記述そのものもまたうごいていく〉という複合的な叙述の試みは、すべての調査研究の「叙述／伝達」の方法（*Darstellungsweise*）に対して求められているものではない。『うごきの場』でとりあげた「プロジェクト」について、1種類の文体・字体で表現するのは、形式的には可能ではある。しかし、それは、多声の肉声をコンピュータ音声で代替するような空しい行いになってしまうのではないかと考えた。

「乱反射するリフレクション（*dissonant reflection, riflessione disfonica*）」であるような叙述は、『うごきの場』でとりあげたような“場（*luogo, spazio, posto, sito, caso, circostanza, momento, condizione, situazione*）”——「衝突と出会い（*scontro e incontro*）」のなかにあるコミュニティのうごきをとらえようとするなかから生まれた「方法」であった。そしてまた、ここでの「不統一」「バラバラ」「混乱」は、野宮が指摘する下記の要素とも深く結びついている。

本書は、小奇麗でも、おとなしくもない。……かつて団地でおくられた日々をそのまま再現するみずみずしい言葉の数々と、団地の内外で、ひととひとがぶつかり合い、擦れ合う音が聞こえるほどの近接性、そして、未来を想定し、その未来から照射して、過去のもつ

意味を浮かび上がらせようとする気概、戸惑う読者を一気に飲み込んでしまうような臨場感と創造力、これが他の類書と本書とを峻別する力である。（『うごきの場』「むすびにかえて」470-471ページ）

4 「観察と介入」「当事者との距離を保つことと距離を縮めること」 ——調査研究のジレンマへの応答

野宮はまた、調査研究の方法論についても、「通常の学問的プラクティスを期待する人なら、おそらくこの時点で湘南プロジェクトの推進者である新原に落第点を付けるだろう。何らかの知的生産の保証ができないようなプロジェクト、淡い期待に頼らざるを得ないような知的試みをなぜ行うのか、と」（『むすび』481ページ）といった疑問が突きつけられるだろうと指摘している。通常、研究者がフィールドに入る場合、理論と方法論、テーマとリサーチ・クエスチョンを明確に選択し、対象の範囲と調査期間をきっちりと限定し、必要とされる調査の技法・技量を修得した研究者によって、データを蓄積することが前提となっている。にもかかわらず、『うごきの場』でとりあげられた「プロジェクト」は、「学問的研究のプロジェクト」（観察／聴く）と「政策的プロジェクト」（介入／コミットする）の両側面を持ちつつも、その「膨大な時間」に比して「理解」や「智」が「保証の限り」ではないからである。

メルッチは、遺稿となった「リフレクシヴな調査研究にむけて」（Alberto Melucci, “Verso una ricerca riflessiva”, registrato nel 15 maggio 2000 a Yokohama = 新原道信訳「リフレクシヴな調査研究にむけて」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部、2014年）において、「観察と介入」、「当事者との距離を保つことと距離を縮めること」のジレンマについて語っている（以下、「リフレクシヴ」論文）。

メルッチによれば、社会調査によって社会についての認識を生産する社会学者は、「観察主体と観察される対象の間のジレンマ」、すなわち、「調査研究者と当事者（社会的活動の担い手）との関係性」の問題に向き合わざるを得ない。ここでの「ジレンマ」とは、二元論的な二つのモデルである。すなわち、一つは、「自然科学が想定する客観性（対象性）を模して価値中立的に対象から切り離された観察」を行い、「可能な限りの距離と価値中立性を確保しようとする」という「距離を保つ」モデルである。いま一つは、「距離を縮める」モデル——「特殊な形態の認識が持つ固有の状態をただそのままに受けとめ、さらには観察された社会関係のなかに自らも没し」、調査対象との「距離をなくし、相手の社会的世界の奥へと入り込み、その世界の特徴そして経験を深いところから理解しよう」と試み、なんらかの仕方では社会的世界を映し出す鏡、あるいは代弁者になる」モデルである。

『うごきの場』における二つの「プロジェクト」は、「距離を縮める」試みのなかでも、「当事者たちの行動や体験に介入し、その場を作り変えていく」という意図が組み込まれた「介入

的調査あるいはアクション・リサーチ」に近いものであった。しかしながら、野宮が指摘するように、「介入的調査」に比して、調査者と当事者の「境界が曖昧」（『むすび』480ページ）となっており、さらには、関係性の配置変え——調査研究者と当事者（社会的活動の担い手）との間、調査研究者間、当事者間における多重・多層、かつ多面的な「感情的な調和」とは遠く離れた緊張感、混乱、混沌が存在し続けていた。また、きわめて可変的かつ局所的に、ヒエラルキー（位階制）の転換や解体が起こっていた（とりわけ2章から6章）。

『うごきの場』の対象となったフィールドでは、この「配置変え（reconstellation/ricostellazione）」が何度も起こり、その流動化を固定化することを「断念」して、流れのなかでなにかを生みだそうとする「うごき」が複数起こっていった。他方で固定化に固執する「うごき」も起こり、去っていくものもいた（4章における「日本語教室」の崩壊、6章におけるキャンプの崩壊など）。

フィールドにおける関係性の「うごき」を、メルッチは「遊び（gioco, play）」という言葉で表している。ここでの「遊び」はネジの「遊び」という含意から派生しており、ゆるく固定されたピボット・ピンのように揺れうごく関係性の「遊び」は、調査そのものにも個々の調査研究者にも起こっていくものである。

調査そのものについて言えば、調査のプロセスは、「ア prioriに決定されているものではない」。「経験的調査を体験したものなら誰しも、調査のなかで調査のプロセスそのものも変わっていくこと、実際に行われたことは、始まった当初のプロジェクトから異なることを知っている。「論理的かつ線形的」な仮説検証による社会調査は、実は、「当事者との間に起こる予想外の出来事や困難のなかでの関係性の修正に拘束されてもいる」。つまりは、「調査者も当事者も、自らの境界を揺り動かし、パートナーの動きと変化する周囲の環境に応じて動く」ものなのである。この「遊び」のプロセスのなかで、調査者も当事者も、自らの立ち位置を変化させていく（『リフレクシヴ』論文95, 100ページ）しかないのである。

この点に関して、野宮は以下のように代弁してくれている。

私は、新原の方法は社会学的介入ではないと考えている。確かに、新原の方法も、社会学的介入も新しい解釈や文化的生成物を重要な達成物だと考える。しかし、社会学的介入は、新原の方法ほど境界が曖昧にはならない。言い換えれば、新原の方法は、単に「介入」とどまらない。調査者、観察者、運動当事者（仲間と相手方）という区分は、重要ではなくなっていく。……第一に、新原が採る方法では、知識の前に行為がある。『異境の地』に降り立つ自己は、その地に溶け込み、自らを投企する。そのことによってでしか、研究の場は生れない。すなわち、研究の場の形成は、行為者である自分自身をどの程度投企できるかによって決まる。第二に、その場は、予定調和的に、あるいは予言の自己成就的に

達成されるものでは決してない。多様な人びとが入っては出ていく。また、その場での感情を伴った人と人との交わりやぶつかり合いの中でしか形成されない。すなわち、行為者として自己投企をしても、その結果はわからないのだ。（「むすび」480-481ページ）

野宮は、この、一見無規定な「プロジェクト」が、（調査研究者が）居合わせる「社会文化的プロセス」も、それを可能にする「舞台」も、参与してつくりあげるといふ特異な様相を呈しているという点について注意を向けている。

新原は、「舞台づくり」を行う。「舞台」とは、湘南プロジェクトの面々が、コミュニティー形成に関与し、参加し、介入するための装置である。「舞台裏」には、団地自治会の人びとや、新原に率いられプロジェクトに参加した学生、またボランティアの人たち、さらには新原自身がいる。しかし、「舞台」が出来た途端、実はもうそこは「舞台」ではなくなってしまふ。「舞台」も「舞台裏」も「社会文化的プロセス」も、何ひとつ明瞭な区分なく混在するようになる。社会から吹き付ける強い風に飛ばされそうになる人びと、その人たちを掬い上げようとする人たち、掬い上げようとする人たちを背後から後押しする人たちなど、すべての人が混在的に一体化する。（「むすび」479ページ）

調査研究すべき場そのものを「つくる」という実践のなかで、調査者、観察者、運動当事者（仲間と相手方）という区分が揺らぎ、その場も、個々人間の関係性も、個々人の内面も、“かたちを変えつつ動いていく（changing form）”。「予見」の範囲・枠組みをこえる多系／多茎の可能性（*le vie possibili verso i vari sistemi*）が立ち現れることへの投企、「観察と介入」のジレンマを乗り越えるための“不断／普段の営み（*movimenti continui e quotidiani*）”という性格を、『うごきの場』の「プロジェクト」は持っていた。

5 「衝突と出会い（*scontro e incontro*）」のなかでの“創造的プロセス（*the creative process, il processo creativo*）”

野宮の指摘でとりわけ重要なのは、『うごきの場』の方法が、「混在」と「メタモルフォーゼ」という特徴を持っているという点である。フィールド（うごきの場）での「衝突と出会い（*scontro e incontro*）」は、異種混交のプロセス、すなわち、“衝突・混交・混成・重合”のプロセスを惹起し、そのなかで、個々人は、その内奥のレベルにまで食い込むかたちで（メルッチの言葉で言えば「内なる惑星（*Il pianeta interno*）」のレベルで），“個々人の内なる社会変動（*change form / metamorphose, metamorfosi nell'interno degli individui corporeali*）”を起こしていく。

新原の方法には、必ずメタモルフォーゼが伴う。舞台を作り、舞台裏で甲斐甲斐しく主役を立てるようにして動き始めるのだが、その動きが次第に、舞台上の主役、裏方も、観客も、そこにいる全ての人を巻き込む形で、大きな「うごき」に変容する。その「場」に居合わせた、一人ひとり、個人個人が主役であるようになる。湘南団地在住外国人のみならず、新原や湘南プロジェクトのメンバー、団地自治会の人、日本語教師など、すべての人がそれぞれの外と内にある「異型」のものに遭遇し、「ぶつかり合い」、「切り結び」、怒り、悲しみ、喜びながら、主役として生きる場所の形成。それが、新原の方法なのだ。（以上、「むすび」479-480ページ）

システム化した調査研究の困難さから、まとまらない「介入と観察」を行い、そのなかでの「失敗」や「喪失」を見つめざるを得なかった。また、何かが実は生まれていたとして、その社会文化的プロセスを客観化させることの困難から、実際になされたメタ・コミュニケーションを、丹念に拾い集めるしかなかった。さらに、この二つの「プロジェクト」の舞台裏での営みが、実はこの試みの根幹にあったわけであるが、ここでは、「未発のコミュニティ」の萌芽であるような何ものかが立ち現れていく瞬間をとらえる〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソツズ〉を生み出すことが、少しでも出来たのだろうか。

メルッチは、とりわけ社会運動の当事者による「創造」と「発明」（トゥレーヌ）の要素に着目したことから、“創造的プロセス（the creative process, il processo creativo）”についての共同研究をすすめた。そのなかで「創造力に関する実質的な定義を確定してしまわずに、当事者との対話や調査メンバー間の対話のなかで、解釈の配置変えをしていくことに対して開かれた理論（teorie disponibili）を創ろう」としていた。「調査のプロセスにおいては、大きく揺れ動きつつも、客観的な立場に立つということも、リフレクシヴでありつづけるということも、避けて通ることは出来ず、……このエピステモロジーのジレンマのなかで生きていくしかない」とした（「リフレクシヴ」論文103ページ）。

私たちの調査研究もまた、「うごきの場」に「居合わせた」プロセスをふりかえり、その活動を理解しようとした認知のプロセスそのものにも焦点をあてつつ、「開かれた理論」を志向せざるを得なかった。野宮によれば、「新原は、社会に関する学問に従事するわれわれが、いままで何世紀もの間、総体として偶有してきた方法論の一切に満足していなかったということ、さらに、既存の方法論的知識を否定し、新しい知の体系をつくりあげようとした、ということである。……この『誰も進んだことがない道』を、新原は進もうとしていたことだけは確かだ」（「むすび」477-478ページ）ということになる。

たしかに、“自らを揺りうごかしつつかたちを変えていく（playing and changing form）”かたちで“始める（beginning to）”という使命は、1980年代後半から1990年代前半にかけて、メル

レルとメルッチの両者から示唆されたものである。社会文化的プロセス、社会現象を因果関係のみから解釈するあり方を相対化するため「対位法的読解 (contrapuntal reading)」を試みたE. サイド (Edward Said) は、その著書『始まりの現象』のなかで、『新たな学 (Principi di scienza nuova d'intorno alla natura delle nazioni)』(初版1725年、二版1730年、三版1744年)の著者G. ヴィーコ (Giambattista Vico) と「対話」しつつ、「始まり (beginnings)」とは何か、それはいかなる「活動 (activity)」「瞬間 (moment)」「場所 (place)」「心構え (frame of mind)」を持つものかについて考察している (Edward W. Said, *Beginnings: intention and method*, New York: Basic Books, 1975年 = 山形和美・小林昌夫訳『始まりの現象——意図と方法』法政大学出版局, 1992年, xivページ)。

顕在化し可視的なものとしてとらえうる「出来事」の水面下に潜在しつつ流動し変化し蓄積されている状態とその社会文化的プロセスという、測定あるいは把握の困難・限界を抱える対象に対して、[何かを] 始める (beginning to) ためには、異なる境界線の引き方、補助線の引き方を提示することでメタモルフォーゼを誘発する必要がある。それがいかなる方法かと言えば、「実践哲学」「社会調査」に対する否定性の運動 (exploring critically and clinically) であり、このような願望と企図に自らを投企するものは、“揺れうごきつつかたちを変えていく (playing and changing form)” しかない。

事実、『うごきの場』のフィールドに入り込んだ「学生ボランティア」の何名かは、自らの“内なる社会的病”に気づき、ふれることで、“自らの社会的病とともにある社会の医者”である“リフレクシヴで療法的なプレイング・セルフ (Reflexive & Therapeutic Playing Self)”, 南米の「社会の医者の社会学」のように、社会の痛苦の体現者としての病者でもある社会の医者として、“身実 (みずから身体をはって証立てる真実)”と“無償性/無条件性/惜しみなき (gratuitousness, guratuità)”は会わざるを得なかった。

メルッチはいつも筆者に、「新たな社会運動を調査研究し、かかわる側もまた、新たな関係性にむけて自らの在り方をつくり変えつつうごいていく勇気を持たなければ、現に起こりつつある“未発の毛細管現象/胎動/交感/社会運動 (movimenti nascenti)”にふれることなど出来ない」と語っていた。それゆえ、『うごきの場』のメンバーが入り込んでいった“異郷/異教/異境”の地——「衝突と出会い (scontro e incontro)」のなかでの“創造的プロセス (the creative process, il processo creativo)”とかかわるものは、みずからもまた“衝突・混交・混成・重合”していくしかなかったのである。

本稿の冒頭で紹介したメルッチとメルレルの言葉は、地球規模の「衝突と出会い (scontro e incontro)」の“社会文化的プロセスの“果実”として立ち現れている“複合的身体 (corpo composito)”を持った“移動民 (homines moventes)”“痛むひと (homines patientes)”たちが、その「顔」をこころおきなく出すことが出来る場を創ることへの勇気を含意している。この使

命を引き継ぎ、「問題解決」とは異なる「うごき」かたで“思行（思い、志し、言葉にして、考えると同時に身体を動かしてみるという投企）”をしていくことが、これからの課題として強く意識されている。

付記：本稿は、新原道信が研究代表者として取得した研究助成金——中央大学特定課題研究費「惑星社会の諸問題に応答する社会運動に関するリフレクシヴな比較調査研究」（2014年度）、前川財団家庭教育研究助成金「地域住民と大学人の協業による“臨場・臨床の智”形成にむけての実践的研究」（2014年度）、「“コミュニティを基盤とする参与的行為調査”による“臨場・臨床の智”の伝達に関する実証的研究」（2015年度）、科学研究費・基盤研究B海外学術調査「“惑星社会”の問題に応答する“未発の社会運動”に関するイタリアとの比較調査研究」（2015年度から2018年度）によって実施した調査研究活動の成果も含まれている。

注

- 1) 「共成 (co-developing, co-becoming)」については、新原道信を研究代表者として、Alberto Merler, Anna Melucci, 古城利明, 中島康予, 柑本英雄, 田淵六郎, 藤井達也, 石川文也, 中村寛, 鈴木鉄忠等が参加した科学研究費による共同研究「21世紀“共成”システム構築を目的とした社会文化的な“島々”の研究」（2004年度から2006年度）、「国境地域と島嶼地域の“境界領域のメタモルフォーゼ”に関する比較地域研究」（2007年度から2009年度）、新原道信の2010年度イタリア・サッサリ大学での在外研究、2011年度以降は、阪口毅、大谷晃たちと立川の公営団地自治会との協業によって、「コミュニティを基盤とする参与的行為調査」を行ってきた。
- 2) Exploring Regions and Communities for Sustainable Ways of Beingについては、研究チームメンバーの主要な研究活動の場となっている地域社会学会の研究例会において、古城利明「3.11以後のリージョンとローカル—東アジア・日本を中心に」（2014年10月4日、明治学院）、新原道信「生存の場としての地域社会の探究／探求」（2014年11月29日、同志社大学）、鈴木鉄忠「『歴史的地域』の再構築—北アドリア海圏国境の市民文化活動を事例に」（2015年2月7日、首都大学・秋葉原サテライトキャンパス）が、それぞれ依頼され基調報告を行い、本研究チームの研究成果を開示し研究交流を行った。また年次大会においては、大会シンポジウムでの基調報告を友澤悠季、コメンテーターを新原道信が行い（2015年5月10日、東北学院大学）、阪口毅（2014年5月10日、早稲田大学）と鈴木鉄忠（2015年5月9日、東北学院大学）が大会自由報告を行っている。
- 3) “未発の状態 (stato nascente, nascent state)”については、新原道信「“未発の状態／未発の社会運動”をとらえるために—3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求（2）」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学25号（通巻258号）2015年3月、43-68ページ、および、『うごきの場』の51-56ページで論じている。
- 4) 古城利明は、『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に応答するために』の終章第2節「『3.11以降』の“境界領域”と“惑星社会”」において、これまでの私たちの調査研究が持つ「限界 (our limits)」について、下記のように問いかけている。

“境界領域”論がこの「物理的な限界」を取り込む「エピステモロジー／メソドロジー」を充分に練り上げていないからではないか、あるいは先送りしているからではないか。だが、すでに触れた「3.11以降」の状況を踏まえれば、この問題をいつまでも先送りするわけにはいかない。さしあたりそれは、新原のいうように、「“生存の在り方”を問う」なかで、また「人間の境界線」の揺らぎを問うなかで自覚的に取り上げられるべきであろう。だがその「エピステモロジー／メソ

ドロジー」とは何か。ここに残された課題があるように思う。「惑星社会」から「惑星」を展望に入れた「エピステモロジー／メソドロジー」、それは宇宙論を前提とした身心論なのか、空無を覗き込んだ現象学なのか、課題は深い。(古城利明「再び“境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”へ」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に应答するために』中央大学出版部, 2014年, 442-443ページより。)

それゆえ、『“境界領域”のフィールドワーク』以降の課題は、すでに出会っていた惑星社会の諸問題に真っ正面から取り組み、とりわけ「3.11以降」の惑星社会と人間の限界から始めることである。つまりは、定型化した「問題解決」によって向き合うべき根源的な課題をやり過ごし「先送り」していくという思考態度 (mind-set) からぶれてはみ出すこと。手元に蓄積された知慧 (sapienza) や智恵 (sapere) を全否定するわけではないが、これまでの「知」の枠組みや組成を一度は手放すことを恐れないこと。ひとまず解きほぐす (unlearning) ことへの勇気を持って、「人文的／人間的な素人 (humanistic amateur)」（ベラー）として、学問を普請し直すことが、「3.11以降」の焦眉の根源的な課題となった。

5) 中村寛もまた、『うごきの場』の「エピローク」において、同書の叙述と構成が、「あらかじめ形式的な『完璧さ』を拒絶しているし、拒絶せざるを得ない状況のなかで作品が成立することからくる気迫と臨場感がそこにはある」(461ページ) という指摘をしている。

6) 本節での議論は、すでに、叙述の思考実験を試みた論文である新原道信「A. メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学21号 (通巻238号), 2011年でもなされている。「“叙述／伝達”の方法」における「多重／多層／多面的な語りをすること (のエピステモロジー)」については、2000年10月に開催された第17回よこはま21世紀フォーラム「ヨーロッパ統合と日本」の成果をまとめた永岑三千輝・廣田功編『ヨーロッパ統合の社会史』(日本経済評論社, 2004年)の作成途上で、東京大学の小野塚知二教授よりいただいた示唆に、そのほとんどを依拠している。

また、“深層／深淵”への接近については、下記の論考などで、「“叙述／伝達”の方法」における思考実験を試みてきた：新原道信「深層のヨーロッパ・願望のヨーロッパ—差異と混沌を生命とする対位法の“智”」永岑三千輝・廣田功編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社, 2004年；新原道信「深層のアウトノミア—オランダ・アイデンティティと島の自治・自立」古城利明編『リージョンの時代と島の自治』中央大学出版部, 2006年, 新原道信「境界領域のヨーロッパを考える—移動と定住の諸過程に関する領域横断的な調査研究を通じて」『横浜市大論叢』人文科学系列, 第60巻, 第3号, 2009年。

“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動 (movimenti nascenti)”については、新原道信「“境界領域”のフィールドワーク」から“惑星社会の諸問題”を考える」新原道信編著『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に应答するために』(中央大学出版部, 2014年)で定式化を試みている。